

徳島大学病院がん診療連携センターフォーラム

小児・若年医療の今

「徳島大学病院がん診療連携センターフォーラム」が3月16日、徳島市の徳島大学病院日連ホールで開かれた。知って納得!! 徳島県のがん治療・小児・AYAから最新のゲノム医療まで」をテーマに徳島大学の専門医ら7人が講演し、小児とAYA(思春期・若年成人世代)のがんや最新のゲノム医療、院内のがん相談支援センターの活用方法を解説した。講演の要旨を紹介する。

開会あいさつ 宮本氏



国の新たながん政策では、小児とAYA世代の対策やゲノム医療の推進に重点が置かれている。今回のフォーラムではこの二つの話題を中心に、日頃から現場で患者と接している徳島大学病院の医師ら7人の専門家が最新の状況を分かりやすく紹介してくれる。講演内容を参考にし、知識を増やし、今後の健康づくりに役立ててもらいたい。疑問があれば徳島大学病院のがん相談支援センターや、他病院の類似施設を気軽に利用してほしい。

フォーラム出席者

- 宮本 弘志氏 (徳島大学病院がん診療連携センター長)
- 渡邊 浩良氏 (徳島大学病院小児科医師)
- 土岐 俊一氏 (徳島大学病院整形外科医師)
- 藤野 泰輝氏 (徳島大学病院消化器内科医師)
- 阿部 彰子氏 (徳島大学病院産婦人科医師)
- 井上 寛章氏 (徳島大学病院食道・乳腺甲状腺外科医師)
- 近藤 英司氏 (徳島大学病院耳鼻咽喉科医師)
- 川下 美紀氏 (徳島大学病院緩和ケアセンターコーディネーター)

小児科における小児・AYAがん診療



小児がんはまれな疾患で、かつては不治の病とされてきたが、治療成績は年々向上し、現在では70〜80%の患者が長く生存できるようになった。抗がん剤がよく効く疾患が多く、成人と比べて副作用が軽いため、化学療法を強化できることがその理由だ。

渡邊氏 化学療法で生存率向上

治療後は晩期合併症(晩期障害)に注意が必要だ。治療に使った化学療法や放射線治療が原因で成長・発達への影響や内分泌(ホルモン)の異常、中枢神経の異常、臓器への影響、二次がんの発生などの可能性がある。

今後必要なのは、診療の中心となる小児がん拠点病院の整備や専門医の育成に加え、化学療法の強化でも治療が難しい再発・難治性小児がんに対する新しい治療法の開発、晩期合併症への対策だ。

がん遺伝子の関係はわたくしはがん家系?



がんができる時、がんに関わる遺伝子の発現が細胞で起きている。変化(複製のエラー)が起これば原因は紫外線や放射線、たばこ、生活習慣、加齢などによるダメージだ。ヒトの細胞には修復機能があるためエラーの多くは修復されるが、修復されない変化が積み重なるとがんになる。

阿部氏 複数発症「遺伝性」疑い

このような遺伝子の変化をまとめて検出するのが、がん遺伝子パネル検査。検査で調べられる数百個の遺伝子の中には、がん家系(遺伝性腫瘍)に関わるものも含まれている。

遺伝性腫瘍の人の細胞は、生まれた時から既に1本の遺伝子が変化した状態にあり、対になるもう1本に変化が起きるとがん化することから一般の人よりもがんになりやすい。しかし、遺伝性腫瘍でも変化が起これば遺伝子腫瘍の特徴としては、遺伝性腫瘍の特徴として、若くしてがんになる、同じ人が複数のがんにかかる、血縁者に同じがんにかかった人が複数人いるといったことが挙げられる。これらに当てはまる場合は遺伝性腫瘍が疑われる。

がんゲノム 乳がん



進行・再発乳がんの遺伝子パネル検査について、日本乳癌学会の診療ガイドラインでも、現時点ではパネル検査の適切な実施時期や事後改善への効果は不明だが、有用性が明らかになるだろうと期待されている。

井上氏 パネル検査 有用性期待

これまでに進められた検査では患者の約半数に遺伝子の変異が見つかっている。そのうち1割で、乳がん治療には保険がきかないが効果が期待できる薬を予測することができた。

もう一つの問題は、再発した病巣から組織を採取するのが難しいことだ。一部がんで再発過程で性質が変化するという特徴があるため、再発部位から採取して検査するのが望ましいが、部位によっては困難な場合がある。

頭頸部がんのゲノム医療について



頭頸部がんは、口の中やのど、鼻、耳の中、甲状腺、唾液腺などの頭や首に発生するがんの総称で、全がんの5%程度を占める比較的珍しい疾患だ。

近藤氏 遺伝子変異解明し治療

ゲノム医療の一つであるがん遺伝子パネル検査は、がん細胞の多数の遺伝子異常を網羅的に探索できるものだ。日本では現在、二つの検査が保険適用となっており、標準治療がない、もしくは終了した固形がんの患者らに適用される。

ただ、変異が確認されない、対応する薬が未承認や適応外、臨床試験での治療薬がないといった理由から、有効な治療薬が見つかる頻度はまだ10%程度と低い状態だ。

AYAがん



AYA世代(若年成人)は大きく三つに分けられる。白血病やリンパ腫などの小児に多いがん、乳がんや大腸がんといった成人に多いがん、患者数が少ない希少がん。骨や筋肉、神経にできる肉腫も希少がんに含まれる。

AYA世代特有の問題として、成熟の過渡期にあり、治療方針などの決定に親が関与して複雑性が生じることが挙げられる。また、就学、就職、恋愛、結婚、出産といった人生の転換期を迎える。

土岐氏 診療にチーム体制重要

AYA世代のがんは大きく三つに分けられる。白血病やリンパ腫などの小児に多いがん、乳がんや大腸がんといった成人に多いがん、患者数が少ない希少がん。骨や筋肉、神経にできる肉腫も希少がんに含まれる。

AYA世代特有の問題として、成熟の過渡期にあり、治療方針などの決定に親が関与して複雑性が生じることが挙げられる。また、就学、就職、恋愛、結婚、出産といった人生の転換期を迎える。

消化器がんにおけるがんゲノム医療



がんの発生や進行には遺伝子異常が関係していることが近年の研究で分かっており、特定のがん遺伝子に対応した分子標的薬と呼ばれる薬を使った治療が年々増えている。

検査結果を治療につなげるには、標準治療がない発生場所不明のがんや希少がんの患者のほかに、標準治療を終えたが終了見込みの固形がんの患者が、入院中は検査できないため、外来通院中ということも条件となる。

藤野氏 分子標的薬投与が増加

がんの発生や進行には遺伝子異常が関係していることが近年の研究で分かっており、特定のがん遺伝子に対応した分子標的薬と呼ばれる薬を使った治療が年々増えている。

検査結果を治療につなげるには、標準治療がない発生場所不明のがんや希少がんの患者のほかに、標準治療を終えたが終了見込みの固形がんの患者が、入院中は検査できないため、外来通院中ということも条件となる。

当院のがんゲノム医療相談窓口とコーディネーターの役割



がん細胞のゲノムを調べて遺伝子の変化を見つけ、診断・治療するのががんゲノム医療だ。このために行われるのががん遺伝子パネル検査で、徳島県内ではがんゲノム医療連携病院の徳島大学病院だけが受けられる。

遺伝性腫瘍が見つかり、がんになりやすい体質だと分かる可能性もある。必ず発症するとは限らないが、これを知りたいかどうかは希望を尊重している。

川下氏 保険診療の適用に条件

がん細胞のゲノムを調べて遺伝子の変化を見つけ、診断・治療するのががんゲノム医療だ。このために行われるのががん遺伝子パネル検査で、徳島県内ではがんゲノム医療連携病院の徳島大学病院だけが受けられる。

遺伝性腫瘍が見つかり、がんになりやすい体質だと分かる可能性もある。必ず発症するとは限らないが、これを知りたいかどうかは希望を尊重している。

| 曜日 | 時間 | 放送日 | チャンネル |
|----|-------------|---------|-----------------------|
| 木 | 13:00~15:00 | 25日 | ケーブルテレビ徳島111ch(11ボタン) |
| | 20:00~22:00 | | |
| 土 | 15:00~17:00 | 27日 | |
| 日 | 11:00~13:00 | 21日・28日 | |

(注)特別番組や編成の都合により、やむを得ず変更や放送できない場合があります

主催 徳島大学病院がん診療連携センター
共催 徳島がん対策センター 徳島新聞社

【紙面編集】齋藤邦彦